

第3回三重県家庭教育の充実に向けた検討委員会の概要

- 1 日時 平成28年12月11日(日) 13時30分から15時30分まで
- 2 場所 三重県庁 講堂棟3階 131・132会議室
- 3 出席者 (五十音順)
 - ・明石 要一 委員 (千葉敬愛短期大学学長)
 - ・井上 秀美 委員 (三重県市町保健師協議会特別委員、志摩市健康推進課健康増進係長)
 - ・海野 淳子 委員 (三重県PTA連合会理事 (家庭教育委員会副委員長))
 - ・貝ノ瀬 滋 委員 (政策研究大学院大学客員教授) ※座長
 - ・高岡 純子 委員 (ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室長)
 - ・橋本 景子 委員 (高田短期大学特任准教授、臨床心理士)

4 内容

- 【議題】
- ・三重県家庭教育の充実に向けた応援戦略 (仮称) 中間案について
 - ・家庭教育の充実に向けた啓発コンテンツ (たたき台) について

【主な意見】

<三重県家庭教育の充実に向けた応援戦略 (仮称) 中間案について>

- ・ 応援戦略は、非常にまとまってきたので、これをどう実現していくかが課題である。

基本理念の「絆」を「つながり」に変えたのは良い。つながりに関連して、離婚に着目するのも面白いのではないか。離婚届の提出の際は証人2人が必要であり、判子を押すだけでなく、その先のサポートにもつながっていくので、ネットワークを大切にするという視点にもなる。

企業のCSRにもっと着目することが大切である。国では企業が行う青少年の体験活動の表彰制度があるが、同様に企業内の家庭教育支援をCSRで進めている企業を顕彰するようなことを考えてはどうか。

千葉県松戸市で、昔「すぐやる課」が話題となったが、三重県においても「家庭教育すぐ応援する課」を作りワンストップサービスを実現してはどうか。市町でも作るべきである。〔明石委員〕

- ・ 三重県PTA連合会は県教委と連携しチェックシートを配付している。家庭でチェックした結果に対して学校からフィードバックをもらう仕組みであるが、名張市のある中学校では学校に提出する必要がないと言われた。フィードバックがなければチェックシートをつけるモチベーションも下がってしまうので、中学校でも提出することは重要だと思う。

名張市のある小学校区では、「ほめほめ隊」という名で地域の人たちがボランティアで学校に入り、子どもたちをほめるという取組をしている。ほめることは

自己肯定感の醸成にもつながるので、こういった取組の広がりを期待している。
〔海野委員〕

- 20代から60代を対象として体験活動と自己肯定感との関連を調査したところ、家庭でも地域でもほめられることが自己肯定感を高めるという結果が出ており、特に地域の人にほめられることの自己肯定感への効果が高い。〔明石委員〕
- 子どもをほめる際、家庭では魂胆があつて、素直に受け止めてもらえないことがあるので、保護者には、おだてではなく認めてくださいと言っている。また、簡潔にその理由を補足することが大切である。
企業と連携した家庭教育応援の取組は、企業の経営にもつながるので、このような視点を取り入れていることは評価できる。〔橋本委員〕
- 日本人の特徴としてほめられると謙遜してしまうということがあるが、ほめられることの効果は重要である。〔貝ノ瀬座長〕
- 志摩市では、中学生と赤ちゃんのふれ合い体験の取組をこの夏休みに行ったところ、双方とも非常によい表情が見られた。冬休みにも再度機会を作って赤ちゃんの成長ぶりを中学生に見てもらおうと準備している。今後は親子が学校に出向くことなども検討している。〔井上委員〕
- 戦略は、とてもよくまとまっている。
戦略の中で、取組方策のコンセプトが示されているが、子どもの年齢ごとに取組のポイントや重要度が異なってくると思うので、取組の漏れがないかを確認されたい。
「幅広い学習機会や情報の提供」の取組として、健診の場を活用した学習機会等の提供が記載されているが、これは保護者同士がつながりをもちネットワークを深めるよいタイミングなので、ぜひ進めてほしい。
企業のCSRに着目したのは良いこと。そういう機会がないと企業も変わらない。社員教育などで従業員の意識変革を促進できれば良いと思う。〔高岡委員〕
- 人工知能が今後高度化し、介護分野などがロボットに取って代わられると言われる中、日々変化する子どもを相手にする家庭教育は人工知能にもできないということを経営に盛り込んではどうか。
戦略の期間として、5年間の計画としつつも10年先を見据えるという視点は大切である。対症療法も大事であるが、漢方薬のようにじわじわと効くような取組も必要であり、それらを区分するとわかりやすいのではないか。〔明石委員〕
- コミュニティ・スクールのあるところは、学校ではなく地域からチェックシートを届けるやり方もある。地域の人たちがチェックシートの使い方を自分たちで考え相談して、実践、検証できればよい。〔貝ノ瀬座長〕
- 中教審で次期学習指導要領の改訂について検討されており、3つの資質能力の中で、新たに「学びに向かう力」や「人間性」が出てきている。これらは学校教育だけでなく、家庭においても親と子どもがコミュニケーションをとっていく中

で身に付け、その後の子どもの成長に大きく影響してくるものだと捉えている。戦略の中でも、家庭における親子のコミュニケーションについてふれてほしい。〔高岡委員〕

- 取組方策「次代の親としての学びの推進」のポイントとして「家庭科教育の充実」が入っていることには感心した。家庭科の先生の励みになる。〔明石委員〕
- 家庭科は料理や裁縫を教える教科だと見られ軽視されてきたが、実際には、命の教育や男女共同参画、家庭生活、社会生活などにつながっていく内容であり、非常に重要な教科である。取組方策の記述は意義のある記述だ。〔貝ノ瀬座長〕
- 9月に朝食メニューコンクールの審査をしたが、このコンクールは親子で食育に取り組むものでもあり人気がある。感心したのは、メニューの中で、祖父母が作った野菜や手作り味噌を使うなどしていたことで、親子でメニューを考えるとという取組は家庭教育にも有効であると感じた。また、子どもに買い物や料理などでの成功体験をさせる機会を作ることも大切である。〔海野委員〕
- 子どもたちに任せることが大事である。ただ、最近の理科の実験などでは、子どもたちにさせずに、先生が見せるだけであったり、スライドやビデオで見せるのみであったりすると聞く。〔橋本委員〕
- 千葉の学校では、再任用職員に実験の準備をお願いしているという例もある。朝ごはんのメニューコンクールの取組はよいと思う。昔小学校5年生に1週間の平日の朝食をインスタントカメラで撮り、早寝早起きとの関係を調査したことがある。すると、平日5日のうち4日が米食だったのは25%、パン食だったのが40%、残りの35%はミックスという割合で、その中でも米食の家庭ほど早寝早起きであるという結果が出た。米食の方がおかずが多く豊かな食卓につながりやすい。米食かパン食かは家庭が段取り文化を持っているかどうかで分かれている。〔明石委員〕
- 以前に食育について調べたことがあり、朝食を一人でとる「孤食」の子どもが中学生では3割以上という結果も出ていた。週何日か、特に休日は家族そろって食事するなどの団らんも大事である。〔海野委員〕
- 志摩市では、食育に関わる課は、家庭教育と同じように、健康づくり担当、農林水産・産業担当、教育委員会、保育所・幼稚園担当など多数に分かれている。ただ、それぞれの立場で推進したいメインの目的が異なっており、情報共有がなされていないなどの課題もある。この家庭教育の戦略を推進していくにあたって、庁内会議を設けるとしているが、さまざまな取組の発表や情報交換の場があるとよい。〔井上委員〕
- 推進する担当課は、エンジンや船長の役割を担うので、しっかり決めておく必要がある。〔明石委員〕
- 家庭の団らんの大切さなどは、伝え方によっては押しつけと思われシャットア

ウトされてしまうので、団らんの場合を朝か夜かといった具合に決めつけずに、自由度や幅を持たせるなど伝える際には工夫が必要である。〔橋本委員〕

- コミュニティ・スクールの本家であるイギリスをはじめとするヨーロッパでは、コミュニティ・スクールが家庭を応援する取組をしている。たとえば、貧困などから朝ごはんが食べられない子どもには学校で用意したり、子育て中の家庭には、学校を親同士のコミュニケーションの場や悩みの相談を受ける場に活用したりしている。費用はかかるが、日本でも対応できる場所は考えみてはどうかと思う。〔貝ノ瀬座長〕
- 若者の結婚願望の調査では、20代30代の結婚願望、子育て願望が減ってきている。その理由として3つの要因がある。(1) 経済的に厳しい、(2) 一人が楽、(3) 仕事が忙しい、というもので、特に(2)の「一人が楽」という要因が増えつつあることに着目している。一方で、体験活動や地域の人とあいさつをするなどのヒューマンなふれ合いをした人ほど結婚願望が高いという結果が出ている。〔明石委員〕
- 大阪大学の志水宏吉さんという方の著書『『つながり格差』が学力格差を生む』という本が結構売れており、人間関係の「つながり」の大切さという視点では結婚願望の話と同じかと思う。〔貝ノ瀬座長〕

<家庭教育の充実に向けた啓発コンテンツ（たたき台）について>

- 手引きを作ることはよいが、上から目線になると押しつけがましくなるので注意が必要である。手引きはエッセンスにとどめ、参加体験型学習プログラムを重視した方がよい。
マナーキッズプロジェクトという団体があり、「マナーキッズ」調べという50項目のチェックリストを作成したことがある。歩き方、返事の仕方、お辞儀の仕方、生活習慣、社会規範という5つの領域に分けたチェックリストであるが、子どもと一緒にチェックしやすいと親からも好評である。また、その団体ではマナーキッズ体幹あそびという親子でできるタオルを使った遊びなども開発している。三重県でも、県内にあるさまざまな参加体験型プログラムを集めてメニュー化し、親が自由に選択できるように提示することも考えてはどうか。〔明石委員〕
- 学校の懇談の場を活用して、「自分の子どもの自慢するところ」というテーマで意見交換を行ったところ、まったく意見が出なかったことがあった。保護者の自己肯定感が低いと子どもの自己肯定感も低くなってしまうということであり、コンテンツには「子どもの良いところ探し」というテーマもあれば良い。〔海野委員〕
- 国レベルのアンケートでも、自分の強みを言ってもらったところ、低めの評価で集約されてしまうということがあった。日本人の謙虚さがアンケートにも表れている。自尊感情をどうしていくかは大きなテーマである。〔貝ノ瀬座長〕

- 日本人の謙虚さについては、二人きりのカウンセリングの場でも同様の傾向がある。自分の悪いところは話せても、良いところとなるとなかなか出てこない。〔橋本委員〕
- 近年、早寝早起きの傾向が改善されてきているが、それは国の「早寝早起き朝ごはん」キャンペーンが浸透してきたことと、保育所に預ける家庭が増加した結果、保育所に合わせた生活パターンの家庭が割合を押し上げていることがその理由と考えられる。〔高岡委員〕
- 子どもの早寝早起きのためには、まず保護者自身が早寝早起きをすることが必要である。また、子どもに早寝早起きの必要性を伝える際は、なぜ早く起きる必要があるかをわかりやすく説明することが大切である。〔橋本委員〕
- 日本IBMの社長、会長などを歴任された北城さんは、社長を10年間続けたいなら、最低1日7時間は寝なければならないと言っている。睡眠不足は体力、判断力を失う一番の原因で、睡眠が大事だということである。睡眠の例ではあるが、子どもの問題は大人の問題という一例である。〔貝ノ瀬座長〕
- それは働き方の問題にもかかわることである。
参加体験型学習プログラムのテーマにある自立心に関して、テーマと内容とが合致していないように思える。〔橋本委員〕
- 何でもすぐ親が手を出してしまうので、子どもの自立心のためには、待てる余裕が大切だという意味だと思う。〔貝ノ瀬座長〕
- お母さんの家事能力が高いと娘の家事能力が低下すると言われる。要するに、我慢できずに全部お母さんがやっちゃって任せられないということであり、この自立心のテーマは、あまりイライラしてはだめだという意味で書いてもらっていると思う。〔明石委員〕
- 誤解して読んでしまう人がいるとすると、表現を少し工夫する必要があるかもしれない。〔貝ノ瀬座長〕
- 「待つ」という表現もどこかに入れてほしい。子どもの反応を待つことも大事であり、親でも教師でも1分待つことだけでも大きい。〔橋本委員〕
- ワークシートのテーマに「父親の育児参加」があるが、父親のいない家庭にも配慮が必要ではないか。〔海野委員〕
- テーマとして削るかどうかは悩ましいところである。〔貝ノ瀬座長〕
- 以前にシングルマザーを対象にしたキャンプをした際に、学生ボランティアを参加させたところ、参加した子どもたちに男子学生の人気は高かった。つまり、父親であるかどうかは別にして「男性」の参画は必要であるということに留意すべき。〔明石委員〕
- ワークシートのイメージにある「早寝早起き朝ごはん朝うんち」の「朝うんち」

の部分は必要なのか。「早寝早起き朝ごはん」の部分と異なり、理由がよく分からない。〔橋本委員〕

- 早く起きて朝ごはんを食べるとうんちが出やすいという生理的な現象はある。我慢しないことは便秘の予防として大事であるが、朝しなければならないということではない。〔井上委員〕
- このような表現にすると、額面通りに朝しなければならないと受け取ってしまうお母さんもいるので、何十年伝えてきたことであっても見直すのもひとつではないか。〔橋本委員〕
- 子育てと仕事の両立に関して、培ってほしい能力として「受援力」というものがある。つまり、必要なときに必要な人に助けを呼ぶ力のことで、テーマとして取り入れてほしい。

また、妊娠時には、パパママ学級などあるが、その場では、子どもの授乳や沐浴などの話ばかりだと思うので、別の視点として「親準備性」を伝えることも取り入れてほしい。第一子の出産直後は何かと大変でプログラムに参加できない親が多いので、ぜひ妊娠時の学級で取り扱ってほしい。

マナーキッズのチェックシートの紹介があったが、ベネッセでも以前に子どもの個性と母親の個性をチェックする仕組みを作ったことがある。三重県においても、可能であれば、Web上でチェックしたらアドバイスが表示される仕組みを検討してほしい。〔高岡委員〕

- 「手は抜いても気を抜くな」のような、日本の伝統的な子育てのことわざや言い回しを使うと伝わりやすい面があるのではないか。「早寝早起き朝ごはん」も昔から言われてきた言葉であるので定着しやすかったということがある。〔明石委員〕
- コンテンツは冊子での配付はしないということであるが、例えば、妊娠届けの際に妊婦に話ができれば効果的であるので、場合によっては皆に配布することが良い場合もある。コンテンツにふれる機会を創りたい。

また、相談先や読み聞かせの場などの情報も含めて出すことができれば良いと思う。

ワークシートは学習の場に来てくれない人もいるので、そういう場に来なくてもできるようにしくみ、例えば記述式ではなくチェック式にするなどの工夫をすると活用もしやすい。

また、地域や企業向けに、連携の視点からの内容も入れると良いのではないか。〔井上委員〕

以上